プロジェクトD　カイロ日本人学校とエジプト日本学校との交流活動
エジプトでの現地調査（2023 年 12 月 25 日～30 日）報告書

天野幸輔（名古屋学院大学）　鈴木純一郎（東京都多摩市立貝取小学校）

１．交流会の概要

・活動の日時

令和 5 年 12 月 28 日(木)　10：00～15：30

・参加者

エジプト日本学校（EJS）教員 12 名（校長 1 名、TO2 名、教諭 9 名）、カイロ日本人学校（CJS）教員 2 名、他の日本人教員 9 名

・交流方法

（１）参加者全員による模擬学級会の実施

①話合い活動分担　担任：天野　司会：鈴木　副司会：林　記録：平田、EJS 教員 A

②議題「小学生の集団がみんなで楽しめるレクリエーションを決めよう」

③決まったこと「じゃんけん列車」（エジプトのじゃんけん）

（２）決まったことの実践

（３）実践後の振り返り活動

２．交流活動の様子

（１）模擬学級会

担任の指示および司会グループの進行に従い、提案理由に沿った話合いを展開することを意識して全員が話し合えた。日本側の発言では、交流相手の立場を考慮して、自分自身の考えを伝える場面が目立った。それらの意見に応じて、エジプト側からも交流の意義を考えながら発言する姿が見られた。司会グループは、挙手の仕方や指名後の発言のルールを全体で確認しながら進めた。担任教員が必要に応じて助言する場面を適切に取り入れた。記録は日本語とアラビア語をそれぞれ同時に行い、両国が話合いの進行状況を確認しながら話し合うことができた。互いのよいところを取り入れたり、不都合な点を取り下げたりするなど、折り合いをつけて話し合う様子を意図的に演じる場面があった。全員が積極的に話合いに参加した。日本側が手本を示す場面はあったが、エジプト側の話合い活動の進行の仕方や留意点に対する理解は徹底されていた。

（鈴木純一郎）

総じて問題なく進行でき、学級活動の枠組みから外れるような場面はなかった。参加者はみな終始笑顔であり、期待に応えられた研修であったと感じられた。EJS 教員はよく挙手発表した。しかし条件に合わない提案が見られた。過去の EJS での学級活動の動画をあらかじめ視聴したところ、条件の提示がなされていないケースが見られた。そこに鑑み、今回は話合い活動での決定の条件を意識して提示した。今後の研修でこの条件を重点的に扱う必要があるかもしれない。それに関連して、宗教上の理由からボディタッチは許容されないが、EJS 教員からの発言を得るべく、意図的に条件に加えなかった。しかしその点そのものを指摘する意見を出すより、ボディタッチの代案が EJS 教員からいくつか出された。プロジェクトメンバーも児童役で参加し、日本のレク

写真は模擬授業の様子

リエーションを実演するなどして、意図的に話合い活動をリードするなど、研修効果を高めた。急遽、EJS 教員にアラビア語の板書を担当してもらったが、問題なかった。日常から話合い活動で、板書が行われていることが伝わった。

（天野幸輔）

（2）決まったことの実践の様子

話し合った結果、じゃんけん列車を行った。日本の子供たちが遊ぶときに歌う歌で行い、エジプトのじゃんけんで遊ぶことになった。遊びの条件を互いに尊重し合い、楽しく遊ぶことができた。話合いの中で、体に触れることに関するマナーの確認をした。好ましくない接触を避けるように配慮して行った。じゃんけんをした後に体に触れずにつながっているしぐさを維持して動くこととした。ただし、幼稚園や低学年の子供が行うときには、特に気にせず行えることもエジプト側から説明があった。Tokkatsu の時間は話し合って決めたことを実際に行える、とても楽しい時間であることを実体験として積み重ねていくことが大切であると理解し合えた。

（鈴木純一郎）

時間が短縮され、タイトであったが、全員が楽しむ姿を見ることができ、実演を行ってよかったと感じた。レクリエーションを 2 つ決めたが、両方とも日本のものであった。理解されるか心配したが、ルールが至って簡単であったこともあり、すぐに実践できた。言語コードが下がっていることを実感できた。「Tokkatsu を Tokkatsu 的に学ぶ場」になった印象である。カイロ日本人学校との交流に、新たな流れを提案できたと感じた。次回以降は、エジプト側のレクリエーションを共にやってみる機会を設けたい。また D チームの目的からすると、この場に保護者も加えられると、よりモデル化が進むと感じた。

（天野幸輔）

（3）振り返り活動の様子

休憩後、EJS 教員とカイロ日本人学校教員を均等に 2 班に分け、グループインタビューを行った。全体を通じて、特に EJS 教員は多くを、熱心に語った。自分の体験に基づく内容が多く、Tokkatsu の実践に熱心であることが十分に伝わってきた。ここまでの時間が延びたうえに、そもそも通し

写真はレクリエーション実演の様子

写真はグループインタビューの様子

時間が短縮されたこともあり、質問に 1 つ答えたところで授業に行った EJS 教員もいた。EJS 校長も、一実践者としての立場で語り、理想の授業像を抱いていることが伝わった。一般教員は、校長の前であることに何ら気兼ねがない様子で、堂々と語り続けた。模擬授業から学んだことに関しては、細々としたこと（板書に利用されたいわゆる“学級会グッズ”など）に気づいていた。今後は研究授業から、授業前の指導案検討の段階にまで高められるような印象をもった。

（天野幸輔）

提案理由に沿った話合いが行えた。特に互いの国の文化や風習、マナーなどを尊重し合って発言するように意識できたことは、大切なポイントをおさえたことになる。司会グループの話合いの進め方、担任が介入するタイミングや指導内容、発表するときの基本的なルールなどは、十分に理解ができたとみられる。実際に話合いを体験することによって、教員がどのような場面で助言したり、注意を与えたりすることが適切であるか、学び合うことができた。実践を行う際には、場所や時間などの条件を考慮して、子供たちが満足感や達成感を得られるように教員がサポートをすることが大切である。場合によっては、失敗したりうまく進行できなかったりすることもあるが、経験を積み重ねることにより、よりよい話合い活動や実践活動が行えるということを認識し合えた。

（鈴木純一郎）

３．成果と展望

(1) 交流活動によって得られた成果

エジプトの教員たちは、話合い活動の基本事項を十分に理解しており、とても意欲的に活動していた。司会グループをはじめとして日本の教員たちがリードし、要所を抑えてポイントを確認しながら進めたため、エジプトの教員にとって Tokkatsu に対する理解が一層深まった。EJS 教員と CJS 教員の新たな交流の仕方を構築することができた。互いの児童が登校していないときの交流の仕方をさらに工夫することにより、双方の研修の場として継続していくきっかけとなった。

（鈴木純一郎）

(2) 展望

まず今後の研究について、提供いただいたデータの詳細の分析を進める必要がある。特に、本報告ではグループインタビューの分析ができていない。よく検討し、目的の達成に向けて、具体的なモデル化を推進する。さらに、模擬授業での発話データを分析することにより、EJS 教員の発言のつながり具合、司会が述べた趣旨との合致具合を把握できる。これに限らず、話合い活動推進上の問題点が明確になれば、今後必要となる研修の方向性も提案できるだろう。

分析結果を、現地日本人スタッフの Tokkatsu Superviser と共有すると、カイロ日本人学校教員との交流に向けて、何らかの提案を得られるかもしれない。EJS 教員に共通する傾向、EJS 保護者に関する情報など、役立ちそうな情報がどのようなものであるか、今回の訪問で把握することができた。カイロ日本人学校保護者へのインタビューも必要かもしれない。同校は、すでに運動会等へ EJS 教員などを招待するなど、交流を開始している。そうしたことを、どの程度認識し、どう評価しているだろうか。またさらには、期待していることなんどはあるのだろうか。そうしたデータは、より実際的なモデル化に向けて、役立つ可能性がある。

（天野幸輔）

次に、今後の交流活動に向けての課題である。年末年始の過ごし方が異なるため、この時期の開催では、CJS 教員の参加が困難である。日常的に CJS と EJS の交流が積み重ねられるように、校務分掌に交流担当を複数任命し、組織的かつ持続可能な連携を進めていく必要がある。特に、EJS に配置されている日本人スーパーバイザーが仲介役となり、双方の希望や予定などを調整する役目を果たせることにより、事前の打ち合わせのスムーズな展開が期待できる。年間の各行事予定や宗教行事の見通しを立てて、交流活動を計画的に行うことが大事である。この点については、PMU が EJS 全体の年間計画を早めに提示し、計画的な交流活動を支えるための配慮が不可欠である。

（鈴木純一郎）